

〈小学校外国語活動〉

進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育む指導の工夫

—タスクを志向した活動の工夫を通して（第5学年）—

石垣市立富野小中学校教諭 亀 川 智 洋

I テーマ設定の理由

今日のグローバル社会においては、インターネットやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）に代表されるような高度情報化社会の進展により、国と国との境界線が曖昧になり、自国のみならず世界中の人々と瞬時に繋がることができるようになってきている。このような時代において、ビジネスのみならず、人々の交流に欠かすことができないツールが、国際共通語といわれている英語である。これからの時代を担っていく児童にとって外国語、その中でも特に英語に触れることは、国際社会を生きていくために必要となっている。平成23年度より、小学校に外国語活動が導入され、今年度で3年目を迎えた。

「小学校学習指導要領解説外国語活動編」（以下「解説外国語活動編」と略す）によれば、その目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」となっている。また、ここで述べられている積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とは、「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのことである。」とされている。さらに、「ジェスチャーなど言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを図る上で大切であることから、体験を通してさまざまなコミュニケーションの方法に触れさせることも大切である。」という解説も付け加えられており、外国語活動において英語を用いたり、何とか自分の伝えたいことを伝えようとしたりすることで、前述のようなコミュニケーションを図ることの意味を、より実感できるのではないかと考える。

石垣市においても、外国語活動が導入された5・6学年、学校裁量により1～4学年において、児童は英語に親しみ、英語によるコミュニケーション活動に取り組んでいる。これまでの活動においては、児童が楽しみながら相互交流ができるよう、ゲームの中に授業で扱うフレーズを取り入れ、ペアやグループでそれらを用いることができるよう指導してきた。しかし、少人数学級において、毎日顔を見合わせている友人と、英語でコミュニケーションを図ることに意欲が見られなかったり、また、得に高学年になると声に出してフレーズを言わなかったり、ゲームなどの活動に消極的になるなどの課題も見られた。その原因としては、教師が、似たようなゲームを繰り返して行い、活動の内容に変化が見られないなど、コミュニケーションを意欲的に図らせるための工夫を十分にしていなかったことが考えられる。

そこで、本研究では、「タスクを志向した活動」という課題解決型の活動を取り入れ、ペア・グループで英語を使用する活動を行いたい。その際、基本のフレーズを基にしながらも、ある程度自由な活動やジェスチャーも含めた会話を行えるようにすることで、児童は、ペアやグループを組んだ友人に対して自分自身の思いや考え、気持ちをよりよく伝えようとするとともに、相手の言いたいことを理解しようとすることで、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「Hi, friends!」を使った活動の場において、英語を用いたタスクを志向した活動によるペア・グループ活動を行うことで、児童は他者と交流することの楽しさを知り、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれるだろう。

II 研究内容

1 小学校外国語活動について

(1) 進んでコミュニケーションを図ろうとする態度とは

「解説外国語活動編」では、小学校における外国語活動の目標を、「①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。」というように、「三つの柱」という表現で示している。小学校の外国語活動においては、外国語を教えるのではなく、体験することにより、外国の言語や文化、外国語の音声や表現に慣れ親しむことが目標である。東野・高島（2008）は、「小学校学習指導要領におけるコミュニケーション能力の素地を構成する3要素」（図1）は、「知識」「態度」「スキルの」な要素のうち、「態度」面に重きを置いて活動を行うとしている。その「態度」とは、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」であり、その態度を、外国語（英語）を用いて育むのである。また、その際、卯城・蛭田（2009）は「特に外国語活動では、児童の言語面でのスキルに限りがあるので、お互いに協調的な姿勢でやりとりすることが求められ、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションも重要となる」と述べている。

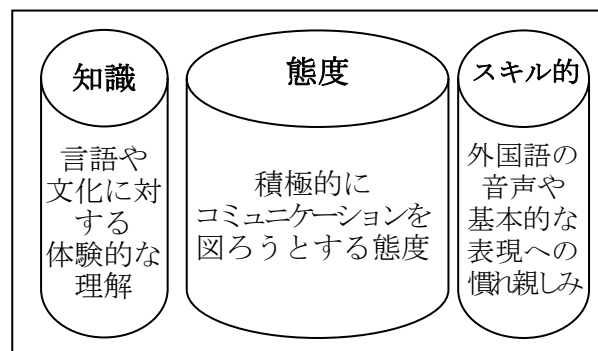


図1 小学校学習指導要領におけるコミュニケーション能力の素地を構成する3要素（東野・高島:2008）

(2) 外国語活動におけるコミュニケーションについて

外国語活動におけるコミュニケーションについて、「解説外国語活動編」の内容1の(1)には、「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。」とある。では、どのような活動を行えば、児童は外国語活動におけるコミュニケーションを楽しんでいると感ずるのであろうか。吉田（2008）は、「教師が英語で言ったことが『わかった』、自分が英語で言ったことが『通じた』という経験を積むことにより、英語という外国語でコミュニケーションができたという成就感を味わうことができれば、(中略)積極的にコミュニケーションをしよう、という態度が育成できる」と述べている。そこで、本研究では、英語を使用する必然性を作り、その活動を行うことを通して、外国語でコミュニケーションができたという成就感を味わわせたい。

(3) 小学校外国語活動における授業展開について

東野・高島（2007）は、現在行われている外国語活動について、「授業は細かいステップに分割され、教師主導の活動が集積され、並列的、単発的な構成になりがちである。」と述べ、このようなカリキュラムを「プログラム型カリキュラム」（図2）としている。それを改善するために、東野・高島（2007）は、「プロジェクト型カリキュラム」（図3）を示し、それについて、時間の経過と共に

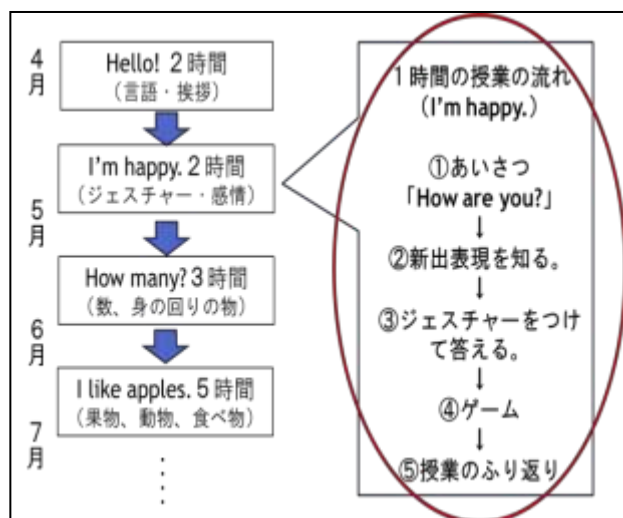


図2 プログラム型カリキュラムの例（東野・高島:2008）

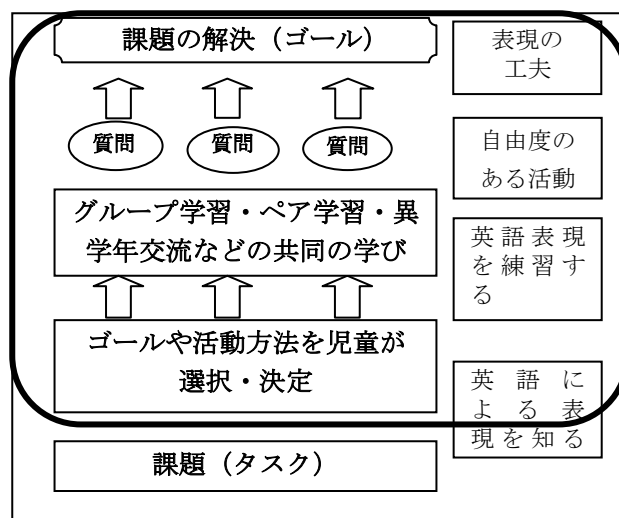


図3 プロジェクト型カリキュラムの例（東野・高島:2008）

に複線で広がりを持って進む中で、児童が自由に選択・決定したり趣向を凝らすなどの、主体的・創造的かつ発展的な活動が可能であるとしている。これまで行ってきた活動を振り返ってみると、

年間カリキュラムは、まさに「プログラム型カリキュラム」のような流れで、年間の計画や1時間の授業が構成されており、児童は教師が計画した活動を、受動的に行うという要素が強かった。しかし、「プロジェクト型カリキュラム」においては、単元の内容が進むにつれ、矢印がひとつから複数に増えていく。すなわち、児童の活動の幅が広がっていくのである。本単元においては、児童は、「グループごとに、誰のTシャツか推測するための質問を自由に考える」という活動の中で、自主的に取り組める余地があるため、楽しみながら活動を行うことができるのではないかと考える。また、児童には、活動の過程において、ジェスチャー等の使用も推奨することで、活動の幅を広げさせたい。

(4) 「Hi, friends!」について

「Hi, friends!」とは、文部科学省が作成した、小学校外国語活動で使用するための「外国語活動教材」のことである。平成21年度から23年度においては、「英語ノート」という教材が使用されていたが、文部科学省によれば、『英語ノート』の活用実績や使用する中で出てきた課題等を踏まえ、外国語活動の一層の充実を図るため、(中略)『Hi, friends!』を作成し、希望する小学校等に配布することとした」としている。このように、全国の希望する小学校に配布されている「Hi, friends!」を用いて、普段行っている活動に少し手を加え工夫することで、児童の興味・関心を喚起し、楽しく活動を行うことができるのではないかと考える。本研究においては、「Hi, friends!」のLesson5「What do you like?」の単元をアレンジし、活動を工夫してみたい。この単元の概要は、色や形、好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しみ、その表現を使って尋ねたり答えたりし合うことである。また、友達の好きな色や形を尋ね、それを基に友達にTシャツを作ってあげる活動も設定されている。今回は、その活動において、児童に好きなようにTシャツを描かせ、それらについてインタビューしながら、描いた人物を特定するという活動を行う。

2 タスクを志向した活動について

(1) タスクの定義とは

タスクという言葉について、高島(2008)は、タスクを「現実社会での言語使用を学習者に教室内でシミュレーション的に疑似体験させる言語活動である。」と定義し、また、Ellis(2008)は、タスクの

表1 タスクの4つの特徴 (Ellis:2008)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (i) 言語を使う目的がある (ii) 意味内容の伝達が第一義である (iii) 話し手間に、情報・考え方などの何らかの差がある (iv) 学習者が自分で考えて言語を使う |
|--|

4つの特徴をまとめている(表1)。このタスク活動は、上述の「プロジェクト型カリキュラム」に含まれる形となる。また、タスク活動において、特に(iii)の「話し手間に、情報・考え方などの何らかの差がある」という項目に着目した「課題解決的な活動」を行い、その中で本時の活動で扱う英語表現を用いることで、児童は、「わかった」「通じた」という実感をもちやすくなり、「コミュニケーションが楽しい」と感じるのではないかと考える。

(2) タスクを志向した活動について

英語を第二言語として教育している欧米諸国では、授業をタスクを中心とした活動として行っており、そうすることで、学習者の言語能力を伸長させる可能性が高いと考えている。欧米諸国のように、周りを外国に囲まれていたり、一つの国にいくつもの公用語があるような国において、タスク活動は有効な言語習得法であると思われる。しかし、我が国においては、日常生活を送っていく上で英語を話す必要性は、ほとんどないと言ってもよく、このような状況においては、語彙や文法知識などが周りからインプットされるようなことはない。そのため、タスクの4つの特徴の(iv)「学習者が自分で考えて言語を使う」ことには無理があると考えられる。

(3) モデル・ダイアログについて

では、外国語活動が児童にとって楽しく、かつ主体的・創造的に行えるようにするためには、どのような方法を探ればよいのであろうか。東野・高島(2007)は、「タスクを日本の学習環境に合わせたものにする方法を探ればよいのである。」と述べ、「タスクを志向した活動」(表2)を提唱している。その内容について、東野・高島は「タスクの4つの特徴」の(iv)「学習者が自分で考えて言語を使う」という文言を「指定されたモデル・ダイアログなどに従って行動する」という文言に置き換え、「特定の目標に向かって行う課題解決的な言語活

表2 タスクを志向した活動の定義 (高島:2008)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (i) 言語を用いて課題解決をする目標がある (ii) 2人以上による情報の授受・交換を行う (iii) 話し手と聞き手に情報(量)の差がある (iv) 指定されたモデル・ダイアログなどに従って行動する |
|--|

動という点ではタスクと同じであるが、創造的な言語使用という点では異なるため、『タスクを志向した活動』と呼び（後略）」と述べている。よって、本研究においては、児童が無理なく英語でコミュニケーションを図ることができるよう「タスクを志向」した活動を行っていきたい。具体的には、先に述べた「Hi, friends!」の Lesson5 「What do you like?」の活動において、児童には、これまでに慣れ親しんだフレーズを中心としたモデル・ダイアログを使用させることで、友だちとお互いに尋ね合ったり聞き合ったりする活動ができるだろうと考える。

(4) ペア・グループ活動について

小学校外国語活動における、ペア・グループ活動の意義について考えてみたい。例えば、普段の学校生活の中であまり言葉を交わさないクラスの友達に対して、好きなことやもの、誕生日等を聞いたりすることは、あまりないであろう。しかし、外国語活動において、その機会を作ることができるのである。外国語活動の中で行われるペアやグループでのインタビュー活動等を通し、日本語では照れくさかったりしてなかなか聞けないような事柄についても、外国語（英語）を使ってならば聞くことができ、お互いに今まで知らなかった相手のことを知るきっかけになる。また、大城・直山（2008）は、「教師が何の目的もなく『What animal do you like?』と聞き、児童も何となく『I like dogs.』と答えていたのでは文型の練習にはなっても生きた言葉のやり取りにはなりません。しかし、『自分と同じ動物が好きな友だちを探そう』という場面を設定すると、聞いたほうは、相手が『I like』の後に何と答えるのかわくわくしながら聞くこととなります。もしも相手が自分と同じ動物を言おうものなら、たとえそれが dogs という一語であっても児童は飛び上がって喜びます」と述べている。このようなコミュニケーション活動を繰り返し行っていくことにより、児童は進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けていくとともに、学級の児童同士の関係も良好なものになると考える。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 「What do you like?」

2 単元の目標

- ・インタビュー活動を通して、好きなものについて積極的に尋ねたり答えたりしようとする。
- ・色や形、好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しむ。
- ・日本語と英語の音の違いに気付く。

3 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
○インタビュー活動において、進んで相手の好きなものを尋ねたり、自分の好きなものを答えたりしている。 ○ジェスチャー等を用いて、コミュニケーションを図ろうとしている。	○「Do you like ～」「Yes, I like～.」「No, I don't like～.」という既習表現を用いて、発話しようとしている。	○外来語本来の発音と、日本語として用いられる際の発音に、違いがあることに気付いている。

4 単元の指導と評価の計画

評価の観点 関：コミュニケーションへの関心・意欲・態度 親：外国語への慣れ親しみ 気：言語や文化に関する気付き

時 数	学習目標	学習活動	評価の観点と評価方法			
			関	親	気	評価規準〈方法〉
1	・相手に好きな色、形を尋ねたり自分の好きな色を答えたりする。	○「Hi, friends!」の中の活動を行いながら、「What color(shape) do you like?」「Yes, I like～.」「No, I don't like～.」の表現に触れる。		○	○	・色・形を聞いたり、答えたりしている。 〈行動観察〉 〈振り返りシート〉

2	・自分の好きな色を塗ったり、好きなものを描いたりして、Tシャツをデザインする。	○第4時の活動で用いるTシャツのデザインを描く。特に制限は設けず、自分の好きなものを描く。	○		・意欲的に自分なりのTシャツを描こうとしているか。 〈行動観察〉 〈振り返りシート〉
3 (本時①)	・次時のインタビュー活動に向けて、質問する事柄を考える。	○次時のインタビュー活動の際に尋ねる事柄を、グループで話し合っている。その際、どういう質問をすると効果的かということを意識して考える。	○		・グループで協力して、質問を考えようとしている。 〈行動観察〉 〈振り返りシート〉
4 (本時②)	・友達の描いたTシャツについてインタビューし、そのTシャツが誰のものなのかを推測する。	○これまでに慣れ親しんだ表現を用いてインタビュー活動を行い、Tシャツについての情報を収集する。その情報を基にグループで話し合い、誰のTシャツか推測する。	○	○	・積極的にインタビューし、情報を集めようとしている。 〈行動観察〉 〈振り返りシート〉
5 (本時③)	・グループで行った推測が当たっているか確かめる。	○前時にグループで推測した、Tシャツを描いた人物について、当たっているかどうかを確かめる。	○	○	・自分たちの推測が正しかったか、確かめようとしている。 〈行動観察〉 〈振り返りシート〉

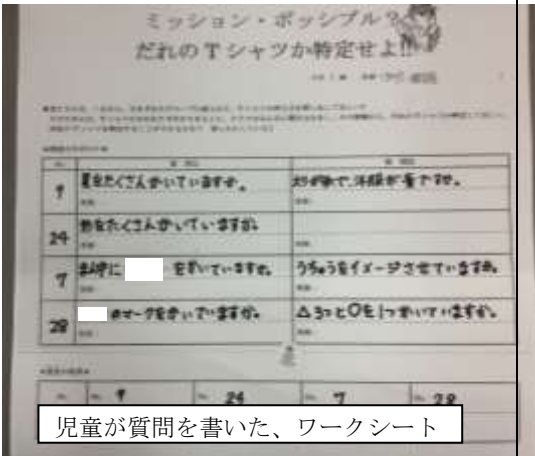
5 本時の指導

(1) 本時1 (3/5) 時

① ねらい

○Tシャツを描いた人物を特定するための、効果的な質問を考える。

② 授業展開

段階	活動内容（児童の活動）	教師の支援	○準備 ★評価
展開	④前時に児童が描いたTシャツを各グループにランダムに配り、それぞれのTシャツが誰のものかを当てるための質問をグループで考え、ワークシートに記入する。 「あなたのTシャツに、虹色はありますか。」 「宇宙をイメージさせていますか。」 「そでが、赤と黄色で塗られていますか。」 	・グループで協力して活動させる。 ・どういう質問をすれば、Tシャツが特定できるのかを考えて、質問を考えさせる。 ・児童が考えた質問を、英語に訳す。  児童が質問を書いた、ワークシート	○ワークシート ★グループで協力して、質問を考えようとしているか。

(2) 本時2 (4/5 時間)

① ねらい

○積極的にインタビュー活動を行い、お互いに尋ね合ったり答え合ったりする。

○グループで協力して話し合い活動を行う。

② 授業展開

段階	活動内容（児童の活動）	教師の支援	○準備 ★評価
導入	1. Greeting ・「チャンツを歌う」	・ボランティアの児童を前に出させ、チャンツを歌わせることで、雰囲気盛り上げる。	○CD プレイヤー

展 開	2. Warm up ①挨拶をする。	英語で挨拶をしてクラスの雰囲気作りをする。 「Good morning, everybody!」 「How are you today?」 今日のめあてを確認し活動内容を知らせる。	
	3. Main Activity ①今日のめあての確認をする。 ミッション：誰の T シャツか推理しよう！ ②「ミッション：誰の T シャツか推理しよう！」 ・教師が英語に直した中から、自分が使用する表現を練習する（5分）。 ・児童は、グループに配られた T シャツが誰のものかを推理するために、クラスの友だちにインタビューをして、情報を集める（10分）。 「What color do you like?」「I like ~.」 「What shape do you like?」「I like ~.」 「Do you like flowers?」「Yes(No), I do(don't).」 ・どのように尋ねたらいいかわからない時は、先生や友だちに聞いたり、また、ジェスチャーを使用したりしても良い。 ・集めた情報を基にそれぞれの T シャツが誰のものかを推理する。（10分）  この T シャツは、A さんのじゃないかな…。	・マナーに気を付けて、きちんと英語で受け答えさせる。   先生、これは何と発音するんですか？ ・尋ね方の分からない児童には、尋ね方を教えたり、ジェスチャーを使用しても良いことを伝える。 ・制限時間を設けることで、集中して活動に取り組ませる。	 えりの色、えりの色…。 What color do you like? ○児童が描いた T シャツ ○ワークシート ★友達の作った T シャツについて、積極的にインタビューし、情報を集めようとしているか。
ま と め	4.Wrap Up ・今日の活動を振り返り、振り返りシートに記入する。 ・終わりの挨拶をする。 「Thank you very much. See you next time!」	・今日のまとめをする。 ・児童の活動をほめる。 ・終わりの挨拶をさせる。	○振り返りシート

(3) 本時 3（5/5 時間）

① ねらい

○グループでの話し合いによる推測が正しかったか確かめる。

② 授業展開

段階	活動内容（児童の活動）	教師の支援	○準備 ★評価																																								
展開	3. Main Activity ②「ミッション:誰の T シャツか推理しよう!」 ・前時に推理した T シャツが誰のものなのか、T シャツを黒板に貼り、グループごとに正解を確認する。 「Whose T-shirt is this?」 だれの T シャツかな? A グループ <table><thead><tr><th>No.</th><th>名前</th></tr></thead><tbody><tr><td>7</td><td>A 君</td></tr><tr><td>9</td><td>D さん</td></tr><tr><td>24</td><td>H 君</td></tr><tr><td>28</td><td>E さん</td></tr></tbody></table> だれの T シャツかな? B グループ <table><thead><tr><th>No.</th><th>名前</th></tr></thead><tbody><tr><td>5</td><td>B 君</td></tr><tr><td>6</td><td>C さん</td></tr><tr><td>8</td><td>G 君</td></tr><tr><td>12</td><td>F さん</td></tr></tbody></table> だれの T シャツかな? C グループ <table><thead><tr><th>No.</th><th>名前</th></tr></thead><tbody><tr><td>9</td><td>C 君</td></tr><tr><td>10</td><td>B さん</td></tr><tr><td>21</td><td>F 君</td></tr><tr><td>27</td><td>G さん</td></tr></tbody></table> だれの T シャツかな? D グループ <table><thead><tr><th>No.</th><th>名前</th></tr></thead><tbody><tr><td>6</td><td>D 君</td></tr><tr><td>11</td><td>A さん</td></tr><tr><td>29</td><td>E 君</td></tr><tr><td>30</td><td>H さん</td></tr></tbody></table>	No.	名前	7	A 君	9	D さん	24	H 君	28	E さん	No.	名前	5	B 君	6	C さん	8	G 君	12	F さん	No.	名前	9	C 君	10	B さん	21	F 君	27	G さん	No.	名前	6	D 君	11	A さん	29	E 君	30	H さん	・正解したら、名前の横に花を付ける。 ・児童のインタビュー活動について褒める。	○児童が描いた T シャツ ★自分たちの推測が正しかったかどうか、興味を持って授業に参加しているか。
	No.	名前																																									
7	A 君																																										
9	D さん																																										
24	H 君																																										
28	E さん																																										
No.	名前																																										
5	B 君																																										
6	C さん																																										
8	G 君																																										
12	F さん																																										
No.	名前																																										
9	C 君																																										
10	B さん																																										
21	F 君																																										
27	G さん																																										
No.	名前																																										
6	D 君																																										
11	A さん																																										
29	E 君																																										
30	H さん																																										
	各グループで推理した、T シャツを描いた人の名前																																										

IV 仮説の検証

1 「タスクを志向した活動」に対する児童の反応

(1) 課題解決的な活動について

今回の検証授業においては、外国語活動教材「Hi, friends!」に収録されている活動をアレンジし、児童一人一人が描いたTシャツについて、インタビューしながらそれらについての情報を集め、その情報を基に誰のTシャツかを当てるという活動を行った。その際、この活動を「ミッション（作戦任務）」と呼び、児童が興味を持って取り組めるように工夫した。児童に取ったアンケート結果から、今回の活動について検証してみると（図4）、「楽しかった」と答えた児童の割合が90%、「どちらかといえば楽しかった」と答えた児童の割合が7%となり、両方の結果を合わせると97%の児童が楽しさを感じたと回答している。普段の外国語活動の時間において、活動に集中できず、参加していない児童がいたが、今回のインタビュー活動には積極的に取り組んでいる姿が見られた。また、児童の感想（表3）からも、楽しく活動できたことが読み取れる。

(2) 指定されたモデル・ダイアログなどに従って行動することについて

児童は指定された表現に従って行動することになるが、今回の検証授業においては、できるだけ児童が言いたい事柄を英語で言えるよう、あらかじめそれらを日本語で書かせておき、教師が日本語から英語に直して、児童に言わせるという方法を取った。その際、英語の表現は、本単元で扱っている「like」をできるだけ使った表現にするよう努めた（表4）。その理由として、児童が書いた日本語をそのまま訳すと、児童にとって、大変難しい英語表現となってしまう、外国語（英語）に慣れ親しむという、小学校外国語活動の目的を超え、負担の大きい活動となってしまう。さらに、「タスクを志向した活動」の、「指定されたモデル・ダイアログなどに従って行動する」という視点から、これまでに児童が親しんできた表現を用いることが妥当であると判断し、今回のような訳し方をすることにした。児童には、指定されたモデル・ダイアログを用いながらも、自分の言いたいことを言えるため、より満足度が高まるとともに、自分の知っている表現で、思いを相手に伝えてもらいたいとも考えた。アンケート結果（図5）からは、英語で言いたいことを言うことに関して、90%の児童が「よかった」、10%の児童が「どちらかといえばよかった」と

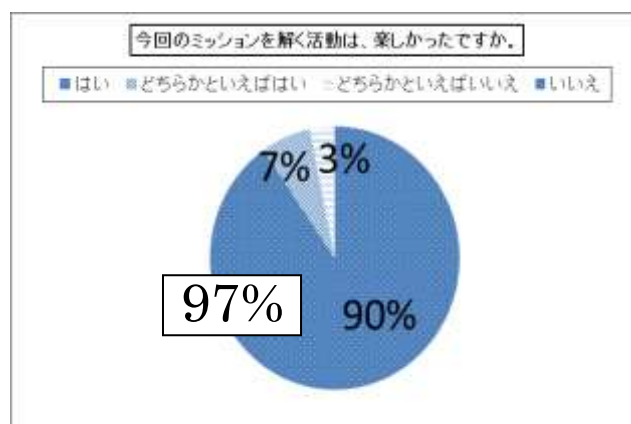


図4 今回の活動に対する児童の関心

表3 児童の感想①

- Tシャツを誰のか当てるゲームを初めてやったので、楽しかったです。
- 英語で質問して、誰のTシャツかわかって楽しかったし、英語を覚えてよかったです。
- 私は、事件を解決することが好きなので、この英語の授業は、とっても楽しかった。
- ミッションが楽しかったです。当たった時は、とてもうれしかったです。

表4 児童が書いた質問の翻訳例

- 襟が赤で全体が青ですか。
→What color do you like?
- 袖の所にスターを描きましたか。
→Do you like a star?
- キラキラしているものが好きですか。
→Do you like (キラキラ) things?
- 宇宙をイメージさせていますか。
→Do you like space?
- 袖と表面に花をたくさん描きましたか。
→Do you like flowers?
- あなたのTシャツに虹色がありますか。
→Do you like a rainbow color?
- 形をいっぱい描いていますか。
→Do you like shapes?

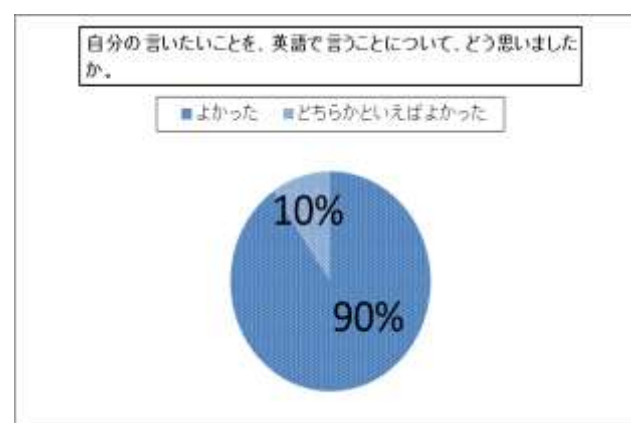


図5 言いたいことを英語で言うことについて

感じており、この結果から、制約のある中での表現ながら、自分の言いたいことが言えたということに満足することができたと考える。また、児童の感想にも、「言いたいことが英語で言えた」ことに対する喜びの気持ちが書かれていた（表5）。また、今回の活動では、「襟」や「袖」、「キラキラ」「イメージ」「表面」「全体」「ありますか」等、言葉で言い表せない事柄はジェスチャーを用いたり、インタビューで情報が得られない場合には、ある程度推測しなければならないことを確認し、活動を行わせた。ジェスチャーを使用して会話を行うことについてのアンケート結果を見てみると、検証前に「ジェスチャーを使用」していると回答した児童は29%とクラスの約3割しかいなかったのに対し、検証後は45%と、約半数の児童がジェスチャーを使用していると回答した（図6）。インタビュー活動中の児童の様子を見ていても、実際に襟や袖を指しながら、一生懸命に質問している様子が見られ、児童の感想にもジェスチャーを使用することの大事さに気付いたと記述されていた（表6）。しかし、まだ残り半数の児童がジェスチャーを使用していないことから、今後、ジェスチャーや知っている単語等を使って、何とか自分の思いを伝えることも、コミュニケーションの一部であることを、児童に伝えていきたい。また、今回の活動において、一部の児童の中には、「日本語の表現には、『襟』とか『袖』、『描きましたか』という表現があるのに、英語では表現されてないよ。」と、違和感を覚えている様子も見られた。更に、あるグループの次の2つの日本語での質問「①あなたは、〇〇が好きですか。②そこで、〇〇が描いてありますか。」を、今回の授業に合わせた英語表現に直した際、どちらも「Do you like 〇〇?」という表現になってしまい、児童からも「同じ英語表現ですよ」と指摘された。このことから、今回のように「意識」のような形を取る場合には、きちんと訳すと表現が難しくなり、インタビューする側もされる側も、意味が分からなくて困るということを説明し、その代わりにジェスチャー等を使用してインタビューするよう、きちんと説明して活動を行う必要がある。

2 外国語活動の時間に進んでコミュニケーションを図ろうとしているか

「タスクを志向した活動」を行った児童の満足度について考察した前項を参考に「タスクを志向した活動」が、「進んでコミュニケーションを図る」ことに繋がったのかということについて検証してみたい。「外国語活動の時間に、先生や友達に色々なことを尋ねたり答えたりしていますか。」という質問に対して、検証前に「はい」「どちらかといえばはい」と回答した児童は88%だったのに対し、検証後は97%へとアップしている（図7）。この結果は、今回の「タスクを志向した活動」における「課題解決的な活動」が、児童にコミュニケーションを図ることを促すとともに、なんとかして情報を得ようとジェスチャーも用いていることが、前項の考察からも分かる。さらに、児童のアンケート結果からは、「先生や友達と英語で会話をすることは楽しいですか」という質問に対して、検証前に「はい」「どちらかといえばはい」を合わせた数値

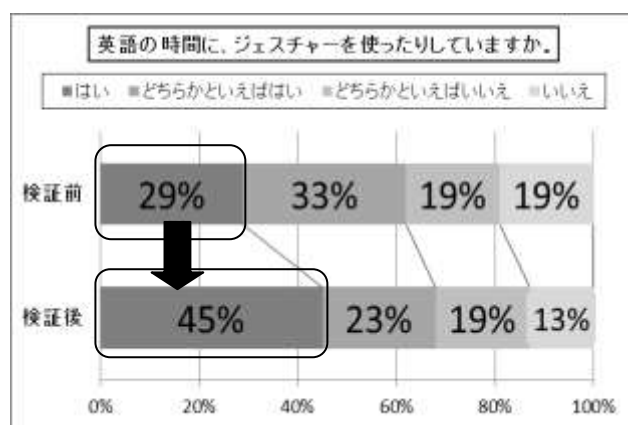


図6 ジェスチャーの使用について

表5 児童の感想②

○いつもは、限られた英語を言っていたけど、自分の言いたい英語が言えたし、またミッションをしたいと思います。

○いつもより、とっても楽しかった。自分の言いたいことを英語で言えてよかった。

表6 児童の感想③

○英語ができなくても、ジェスチャーで何かを伝えたいということが気付きました

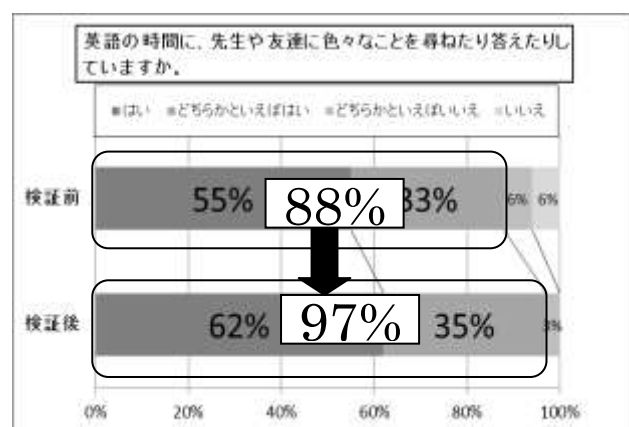


図7 コミュニケーションへの意欲

が71%だったのに対し、検証後は91%へと上昇している（図8）。この結果からは、児童がミッションを解決していくという過程において、情報を得なければいけないという状況に置かれるが、その状況は児童にとって決して難しいものではなく、謎解きのようなワクワクしたものであると考えられる。その中で相手に積極的に質問するなど、コミュニケーションを図ることで、その楽しさを見出したり、再確認することができたのではないかと考える。

3 ペア・グループ活動について

検証授業においては、那覇市内の小学校に協力していただき、実施した。したがって、個々の児童の実態について把握することが難しいため、ペア・グループ活動についての検証は、アンケートによる「楽しい」「楽しくない」の結果や、児童の感想（表7）から行った。今回、保健室登校をしている児童が、今年度初めて学級に戻り、外国語活動に参加した。授業の最初は緊張している様子が見られたが、徐々にグループのメンバーと一緒に活動することができた。その児童の感想には、「最初は緊張したけど、楽しかったです。」と書かれており、グループのメンバーとともに活動できたことが、楽しかったという結果に繋がったと思われる。アンケートの結果からは、「ペアやグループで一緒に考えたり、活動することは楽しいですか。」という質問に対して、検証前に「はい」「どちらかといえばはい」と、肯定的に答えた児童は81%であったのに対し、検証後には97%へと数値が上がり、児童のペア・グループ活動に対する態度は、変容を見せている（図9）。しかし、先生や友達と会話をすることや、ペアやグループで活動することに対し、抵抗感をもっている児童も依然として見られる。実際に、検証授業の際のインタビュー活動において、きちんとインタビューできずに情報を得ることができなかった児童がいた。また、事前のアンケートに「英語が話せなかったり、間違ったら笑われるから恥ずかしい」と書いていた児童も見られた。したがって、今後、外国語活動を通してインタビュー活動やペア・グループ活動を行う際には、インタビュー活動で情報が得られない場合でもグループで協力して活動を行うようにすることが大切である。さらに、英語が話せないことを笑ったり、冷やかしたりすることのないように、授業の最初に活動のルールとして確認する等、活動することに対し、抵抗感をもっている児童への配慮が必要であることが分かった。児童の感想や児童の活動の様子から、これらのことを児童に意識させることで、協力しながら活動できると感じた。

4 考察

タスクを志向した活動の工夫を通して進んでコミュニケーションを図ろうとする児童を育むことを目的に研究を行ってきたが、それが達成されたのか考察する。まず、活動内容の工夫ということで「タスクを志向した活動」を取り入れた。全活動を通しての児童の感想（表8）から、児童が

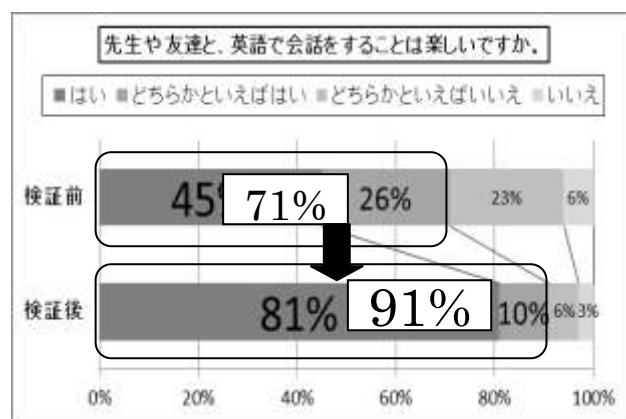


図8 英語で会話をする楽しさについて

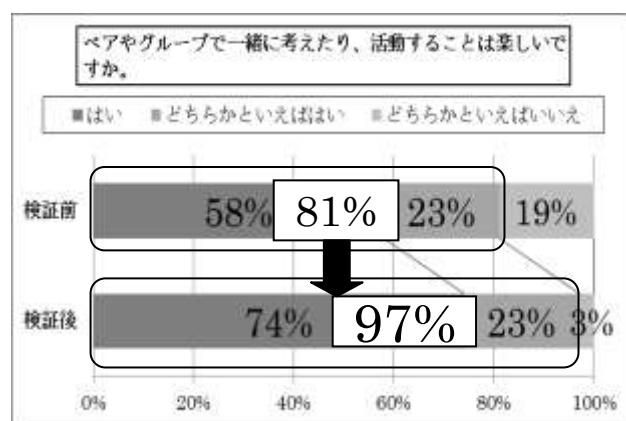


図9 グループ活動について

表7 児童の感想④

- 難しい英語があってもわからなかったけど、グループの人が教えてくれた。
- みんなが一つになって英語活動をしているので、とても楽しかった。
- 今日の英語は、とても楽しかったです。なぜなら、みんなで考えたTシャツ当てゲームもはずれたけど、頑張ったのでいいです。

表8 全活動を通しての児童の感想

- 日本人がアメリカ語で質問するという事は、非常に難しく、質問が終わった後、気持ちが良くなりました。
- みんなと通じた言葉がうれしかった。
- 今回の授業では、英語を覚えるだけでなく、友達と話してみる会話力が身に付きました。私は、将来アメリカ留学するので、役に立てていきたいと思っています。

使用している英語表現は、基本的な表現であるにも関わらず、児童にとって外国語を話し、コミュニケーションを図るということは、とても新鮮であることが分かる。それを受け、「今後も今回のような、課題を解決する活動があればいいなと思いますか」という問いに、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した児童の割合は、97%の高い数値となった（図10）。この結果から、活動の内容を工夫すれば、児童は進んでコミュニケーションを図ろうとすることが分かる。だからこそ、この興味・関心を維持させるためにも、教材研究をしつかりと行い、活動の工夫・改善に取り組むことは大事なことなのである。さらに、「外国語活動の時間は楽しいですか。」という問いに対して、「どちらかといえばはい」と回答した児童の割合は減り、「はい」と回答した児童の割合は、検証前の67%から、検証後には77%に伸びた。このことから、活動内容の工夫は、その教科自体への児童の興味・関心も高めることが分かった（図11）。しかし、今回のように、時間をかけて内容を検討し、しっかりと準備して行った活動を、毎週行うことは難しいであろう。そこで、それぞれのレッスンの配当時間の内、1時間を今回のように手の込んだ活動に充てるといことも考えられる。また、毎時間の活動に少しだけ工夫を加え、これまでとは違った活動にすることもできると思われる。例えば、インタビュー活動を行う際、相手に対して質問するだけの活動ではなく、質問する前に相手の答えをあらかじめ考えてから尋ねる等である。さらに、今回行ったタスク活動は、外国語活動以外の教科にも応用することができるのではないと思われる。特に、社会科や生活科、理科等の教科においてタスク活動を行うことで、児童は楽しみながら課題解決的な活動に取り組み、その教科に対する興味・関心を高め、内容の深い理解に繋げることができると考える。そして、今回の活動を通して、児童にはペアやグループ等、みんなで話し合い協力して活動することの良さにも気付かせることができた。その結果、お互いに積極的に関わろうとする気持ちも生み出すことができたのではないかと考える。外国語活動を通して育まれた、自分の気持ちを相手に伝えとともに、相手の気持ちも理解しようと努めるこのような態度は、学級で積極的に意見発表できる雰囲気を作り出し、算数や国語、特別活動等、他の教科の話し合い活動の場面においても、生かされられると思われる。

以上の検証を踏まえ、「タスクを志向した活動」を取り入れ、活動を工夫することで、児童に進んでコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれたと考える。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 外国語活動の時間に「タスクを志向した活動」を行ったことで、児童に進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができた。
- (2) 活動内容を工夫したことで、児童の外国語活動への意欲が高まった。

2 課題

- (1) 他者とコミュニケーションを図ることが苦手な児童への配慮や、ペア・グループ活動を行う際のルールの徹底。
- (2) ジェスチャーや知っている言葉等を用いて、自分の思いを相手に伝えるための興味・関心を、より高める活動の工夫。

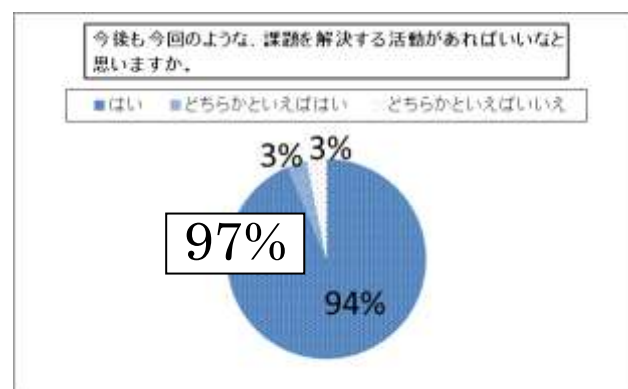


図10 課題解決活動への意欲

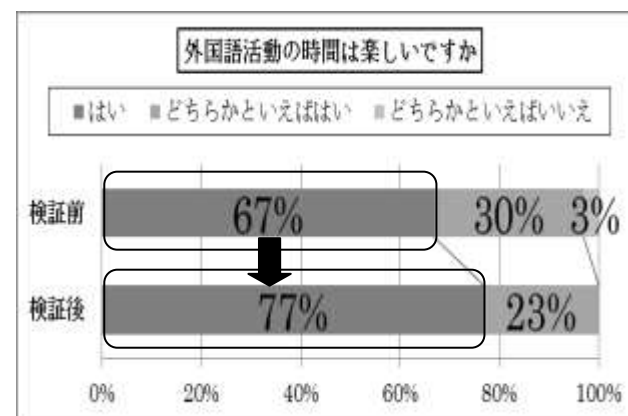


図11 外国語活動の時間への意欲

〈参考文献〉

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 東洋館出版社
- 吉田研作 2008 『21 年度から取り組む小学校英語』 教育開発研究所
- 高島英幸 2005 『英語のタスク活動とタスク』 大修館書店
- 東野裕子・高島英幸 2011 『プロジェクト型外国語活動の展開』 大修館書店
- 卯城祐司・蛭田勲 2009 『小学校教育課程講座 外国語活動』 ぎょうせい
- 安藤忠彦監修 大城賢・直山木綿子編集 2008 『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』 教育出版
- 文部科学省 “Hi, friends!” 関連資料 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm